

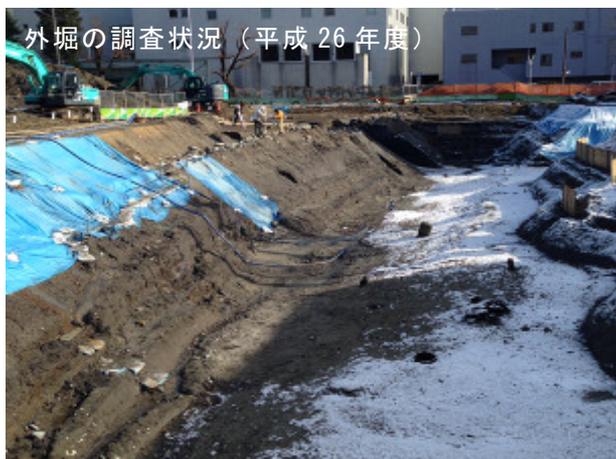
富山城外堀跡から出土した石垣石材と石造物

解説会資料

平成 27 年 11 月 7 日(土) 富山市教育委員会埋蔵文化財センター



出土した石垣石材と石造物



外堀の調査状況 (平成 26 年度)



明治期の二階櫓御門石垣 (富山市郷土博物館蔵)

調査原因 富山市医師会看護専門学校建設に伴う発掘調査

出土した時期 平成 26 年 10 月～27 年 2 月

調査主体 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

概要

平成 26 年度に^{そうがわ}総曲輪小学校跡地で行った富山城外堀跡の発掘調査で、石垣石材と石造物（^{とうろう}燈籠・^{ちょうずばち}手水鉢等）が計 78 石見つかりました。

調査の結果、石垣石材は明治 16（1883）年に取り壊された二ノ丸^{にかいやぐらごもん}二階櫓御門石垣のものと推定されます。二階櫓御門石垣の石材がまとまって見つかるのは初めてです。燈籠・手水鉢は城内の庭園に置かれていたものとみられます。

これらは、明治期に外堀を埋める際に廃棄されたと考えられます。

1. 石垣石材について

◆ どの石垣の石材か

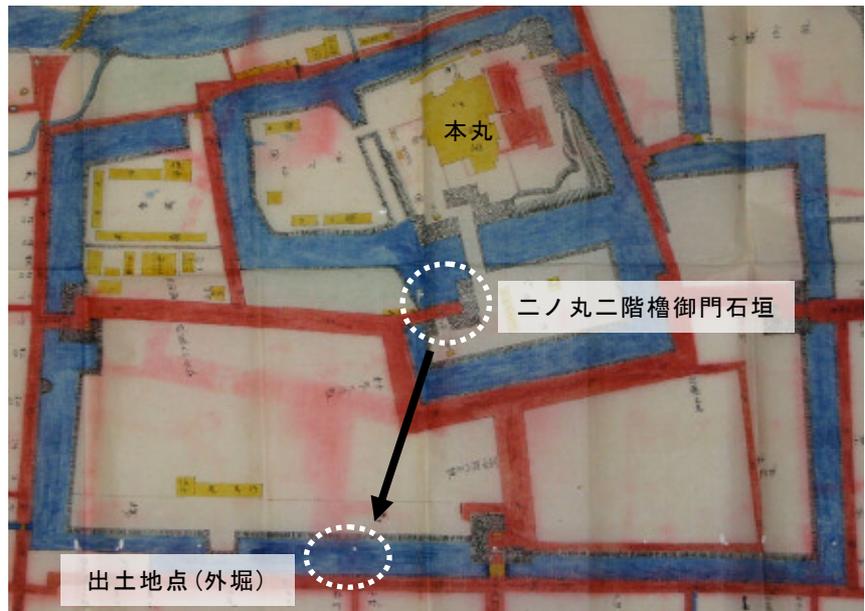
石垣石材は 58 石出土しました。本丸石垣と同じ花崗岩（^{かこうがん} 早月川花崗岩・大熊山花崗岩）が使われています。

小型刻印^{こくいん}をもつ石材は、慶長 10（1605）年、前田利長が築城した際に調達されたものです。石材の整形方法は、慶長期・富山藩初期の特徴があります。

18 石にみられる漢数字の墨書（「ツ七四六」など）は、石垣を積み直す際の順序を表し、石垣の解体修理があったことを示します。また、焼けた石材が多いことも特徴です。

以上の特徴に合致する取り壊された石垣は、二ノ丸にあった二階櫓御門石垣です。

二階櫓御門石垣は慶長 10 年に築造され、天保 2（1831）年に大火で損傷、翌年幕府の許可を得て修理し、嘉永 7（1854）年に石垣修理が完了、翌年櫓御門も立ちました。焼けた石材や漢数字墨書はこのためとみられます。明治 16 年石垣・櫓門は取り壊され、石材の一部が外堀の埋立て前に廃棄されました。絵図から二階櫓御門石垣の地上部は約 600 石あったと推計され、今回その約 1 割が見つかりました。



二ノ丸二階櫓御門石垣の位置と石材出土地点
（「前田利同城図の図」富山市郷土博物館蔵）

二階櫓御門石垣の過去の調査

平成 21 年の路面電車敷設工事中に、県道富山高岡線の大手町交差点で、6 石の石材が出土しました。二階櫓御門石垣の東石垣南辺の基礎石とみられます。

この発見によって石垣の正確な位置を特定できました。



◆ 接合した石材

2つの石材がぴったりと接合し、同じ川原石から割り取られたものとわかりました。石割りの過程を復元すると、この川原石からは4石以上の石垣石材が取られたと推測できます。

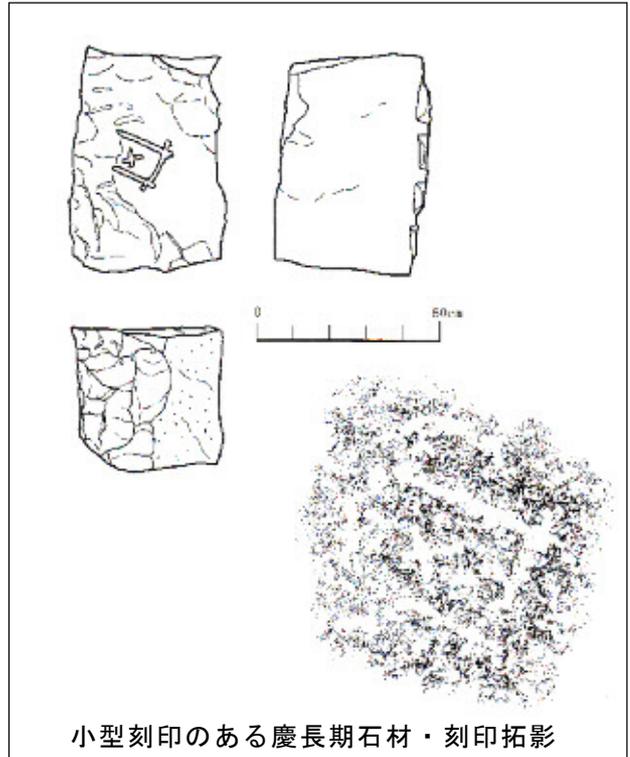
◆ 刻印と漢数字墨書

小型刻印のある石材が1石あります。刻印の大きさは15cmほどで、金沢城・高岡城の慶長期石垣石材の特徴と同じです。同じ刻印は本丸石垣の堀面でも1石見つかっています。

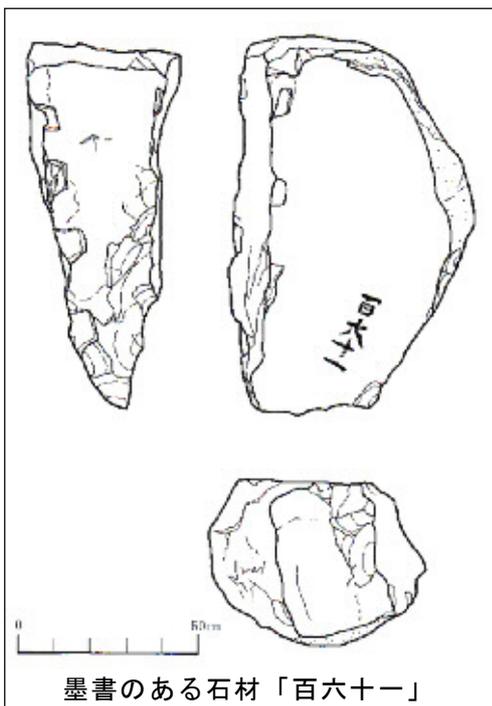
漢数字の墨書は18石にあり、天保2年大火後の解体修理の際に書かれたとみられます。漢数字は「百六十一」や「ツ七四六」という書き方で、本丸石垣にみられる「七ノ十ノ三」などとは異なるため、本丸とは異なる時期・石工による積直しが行われたと推定されます。



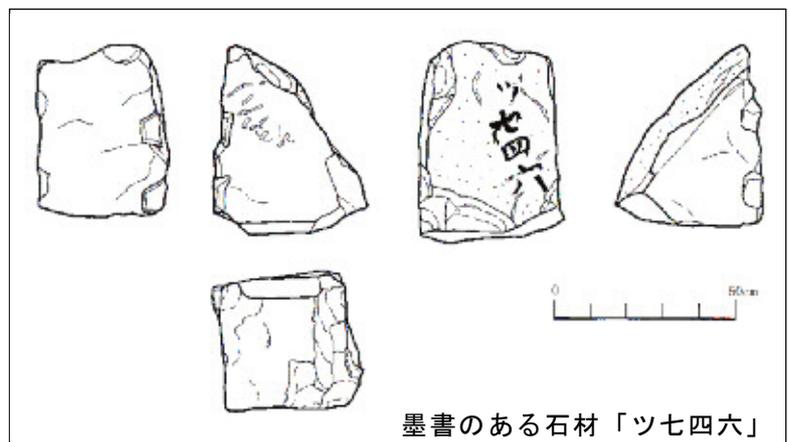
接合した石材



小型刻印のある慶長期石材・刻印拓影



墨書のある石材「百六十一」



墨書のある石材「ツ七四六」

2. 燈籠について

燈籠の4つの部材（宝珠・笠・火袋・中台）が見つかりました。平面形は六角形で、奈良県春日大社の燈籠に由来する春日型と呼ばれるタイプです。推定復元高はおよそ 3.3m です。いずれの部材も欠損や剥落が多くあります。

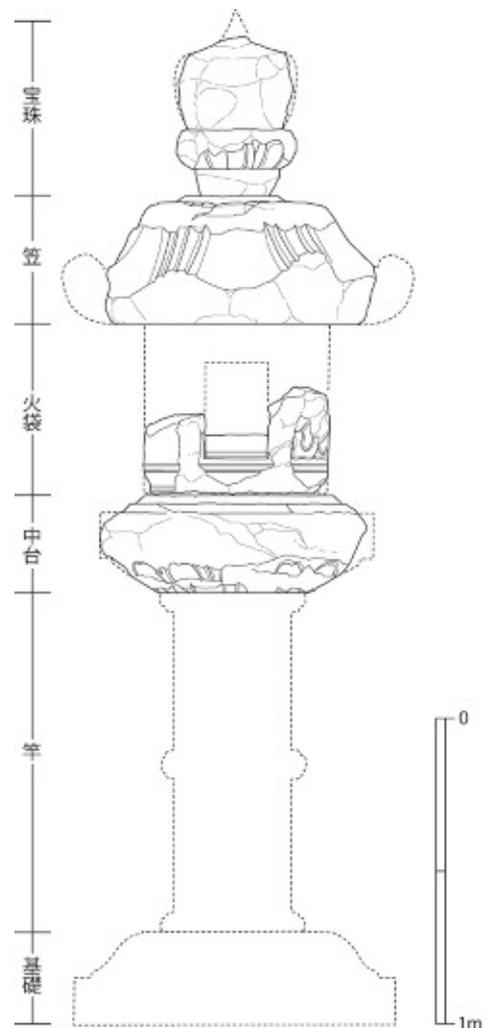
火袋には鹿と雲の彫刻があり、宝珠と中台には蓮弁文が刻まれます。

帯磁率（石が持つ磁力）を調べたところ、西日本産の花崗岩を使っていることがわかりました。

各部材の特徴や出土状況から、江戸時代の燈籠と推定できます。大型であることや一般には入手

しにくい西日本産の花崗岩で作っていることから、身分の高い武家屋敷等、規模の大きな庭園に置かれていたと考えられます。

城址公園の郷土博物館前に、本例に似た由来不明の燈籠があります。郷土博例が1割程大きいことを除けば、文様や全体形状はおおよそ一致しますが、火袋の彫刻が立体感のある厚肉造りで、本例より新しい特徴を示します。



燈籠の復元図

3. 手水鉢について

高さ 88 cm、幅 53 cmの花崗岩製で、慶長 10 年の富山城築城の時に調達された石垣石材を利用して作られています。上部に水を溜める円形の穴（水穴）があいています。水穴の上部は欠損しており、本来はもう少し深かったとみられます。

縦長の手水鉢は、庭園（茶庭）で多く使用されることから、城内の家老屋敷の庭園に設置されていた蹲踞の手水鉢と考えられます。

